

大日	
175	
4	
140	ハ
冊	架函

小學修身書

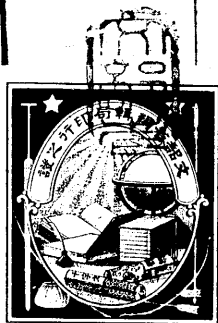
初等科之部
卷四

第二三九號
共六冊

明治十六年六月印行



小學修身書



文部省編輯局

小學修身書卷之四

凡そ世間の人貴きとふく。賤しきとふく。父母の生まざる人やある。され

るまどきとあり。況や養育の恩。山よりも高く。海よりも深く。以て忘る

文部省
修身書

修身書 卷之四

小孝修身書 卷之四 六諭衍義大意
べき。六諭衍義大意

今孝心不本づらんとならば。父母の恩
越よくく思ふべし。幼穉のなごい。父
母とも不。晝夜艱難辛苦をいえず。常不
阿らき風をもいとひて。抱きをだて。少
しも病ひありて。煩いゝなれば。我が身
もかまをたまきなごし思ひ。たゞ子の息
災ふして。成長するを待つより外い。何

の願ひうある。其子稍こおとなしくな
まば。其をめし師をえらび。藝を習はせ。
よき人ふもなれ。のしと思ひ。又せり立
ちまぐなるを見えい。或いあしき友不
も引かま。或い不慮の難ふも逢いんか
と。未だ目不見えぬとまをも。断えず心
ぐるしく思ふなごし。すべて一生の以
やまみ。何事の子のたえしせぬとやあ

る。以て過ぎの時か。子を思ふぬ時やある。
是等の厚恩。たとひ報ドつくさずとも。
せめて孝行ふして。養ふべきとあり。同上
角が一たび失ひて。再び得べからざる
ものな。父母あり。人仕子たるもの。是を
思ふを。以て孝心をおもさざるべき。
同上

第二章

兄弟ハ。かゝるち分りれて。兄とあり。弟と
なるといへども。其源を尋ぬまば。父母
より出でたり。故に幼少の時分を。父母。
兄弟の子供を。右の手左の手。携へ引
きつれ歩き給へば。兄弟の子供も。或ハ
父母の襟。取につき。裾。をかかりて。相
共。不付き。傍ひまをり。物を食ふ。も。兄
弟。一つ所。よて。食し。衣類をも。兄弟を。差

別ふく。替へ合ひ衣るともあり。手習ひ
學文するふも。一度ふ並び。遊び歩くよ
も。連まき立ち行くあり。斯くの如く幼少
の時ハ。兄弟一體の如く親しけれども。
各々年たけてを。以つとなく。親しき薄
くありゆくなり。道は志しあらん人ハ。
兄弟の親しむ。大切ふすなまきとなり。
大和
小學

世間の人乃習ひ。我が弟ふハ。我よよく
弟の道をふしけのへよと。求むまきごも。
我又我が兄ふ事ふる道を。志しけなり
ゆくあり。我よく兄ふ事ふる道を。はく
しそこせ。又我が弟も。我よよく事ふべ
くれ。我が身ふ道を行はずしそ。安りふ
弟をせめ教ふるを。君子の道ふあるべ
しらば。大和中庸

弟ハ。悌を以て兄ニ事ふる道トシ。悌を敬ひ従ふ徳ナリ。他人の年老い位高きニ事ふるも。同ド理アリ。他人小くも。老いたるを敬ふハ。道理の當然あり。まづ親の身を分けて。我ニ先々ちて生まきたる兄を。敬ひ従ふト。勿論の理ナリ。兄ハ。惠を以て弟を帥ゆる道トす。惠ハ友愛の二義を包ねたり。愛ハ。親の子を

愛するが如くシ。懇ニ親シむをいふ。友ハ。友達の互ニ切磋琢磨するが如く。道を教へ。過ちを正し。至徳を明かシ。まゐるやうシ。善を責むる状シ。翁問答

第三章

司馬温公乃のこまひハ。婿をとり。妻を娶るの法ハ。先の家の富貴貧賤ニかまわば。たゞ女の方よりハ。婿の德行を

其家の作法こけ吟味して。心不適ひお
だ。たとひいゝ程負いき人ありとも。取
り結ぶ慮し。徳行勝きたる婿あらば。た
こひ當分負いくとも。終ふい富み榮ゆ
べし。若し愚鈍なる婿なると。當分いゝ
程富貴ありとも。後はい必ぞおちぬる
べし。妻を娶るも。此道理ふまば。若し徳
行ふかまらば。妻の家の富貴なるを求

めて迎ふまば。婿乃家の貧いき不驕り
て。舅姑ふも事へど。其夫をも輕んじて。
驕りたるぶる心を。不いまくふしを。
其家やゝのほらぬものありよ。たと
ひ妻の寶ふて。其家富に榮ゆやも。男と
生まれたらん程のものを。恥づべきと
ふあらずや。大和小學
夫い。和義を以て妻をいざふ道とを。

和ハ親ト和合する徳あり。義ハ道理
ニ從ひてさ以なんし。非道をえらびま
つ不徳なり。翁問答

詩不云なく。寡妻不刑里し。兄弟ニ至り。
以テ家邦を御む。詩經

妻ハ順正の二徳を以て。夫不事ふるを
本やす。順を心だて柔順ふ。そのいひ顔
ぶり。立ちぬるまひほども。やをらかふ

從ふ徳なり。正ハ義理作法を正しく守
る徳あり。翁問答

詩不云いく。桃の天々たる。灼々たる其
華。この子よ。不歸ぐ。其室家ふよるし。
詩經

夫婦の存のみだり。いいて。禮儀不
々れば。その家をさほらばして。父子の
あひだも。ふしぐりたるものあり。夫

婦の禮儀さへ。たゞしくやまのふを。父
子のあひだも。相志さす。たゞひ小義
理をおもひ。禮儀たゞしく有りて。よる
づ乃志と。やまらふやまのふを。和
小學

家をよく保つと。よく保たざると。夫
の徳不徳のふあらば。又妻の行ひの
善惡ふよれり。古人家貧しく。良妻

を思ふといひ。人々も。空なり。夫の外を
治め。妻は内治むるが職分あり。夫よ
く勤儉ふまごも。妻も。放逸ふ。怠りて
勤めず。驕りて。儉約ふ。ざれば。家を保
ち。家道訓

女子は。我が家ふ在りて。我が父母を。
専ら孝を行ふ。とわらあり。去まごも
夫の家は。行きて。専ら舅姑を。我が親

家道訓 卷之四 八

山學傳身書 卷之四
孝行
よりも重んじて。厚く愛し。敬ひ。孝行
を怠くすべし。親の方を重んじ。若し
の方を輕んぢる。となれば。舅姑の方を
朝夕の見舞ひを。闕くべし。舅姑乃
方の勤むべき業を。怠る。ゆるさず。若し
舅姑乃命あらば。慎み行ひて。背く。ゆる
らば。萬の事。舅姑より問ひて。其教へ。小ま
るまをべし。女大學

第四章

家の主となりて。三族を親しむべし。
三族は。第一小父の族。第二は母の族。第
三小妻の族あり。父方乃一族は。本族と
いふ。先祖より。同ド血脈を傳へたる者
をまじ。親疏のこのなりあまじ。何つく親
しむべし。父の族をあつく親しむは。是
又先祖へ事ふる道なり。次ぎ小は。母方

の一族ハ。是父の族ハ。はぎて親しむべし。次ぎ小妻の一族ハ。母の族ハ。はぎて親しむべし。三族を親しむ。其次第輕重のくの如し。是古の法なり。家道訓

今の人ハ。妻の族を専ら親しめて。父の族母乃族ふらと。輕重あるを知らず。父母への不孝あり。おろりなりといふべし。妻族を親しむべし。はぎて親しむべし。

よハ。何らず。輕重の次第あるべし。同上

親戚の間ハ。多々誠を以て交わるべし。若し我より久しく音問をおろす。そのおせば。只我が情のうすくして。疎略あるを謝すべし。餘事は事よせて。いつを謝すべし。是小事といへど。誠の道不あらざれば。心術を害するをいふ大なり。大和俗訓

親戚不對し。財をやり取りする時。我が財を損せざるやうし。我が利運の如くせんとすれば。快からざるをとり。取るふもやるまも。我が財を少し損失する。我といざれば。何事なく。我も人も。互まはちよ。家道訓

せり親類乃衰微を見つぐ人多し。されや一度り二度見つきて。其人よく保た

さま。怒り腹立ちて。終ふ。他人よりも悪く疎むとも。又多し。仁者を見も。あらぬ人のあをれをだふ。一旦は。見過ぐさば。親類よ。あらずとて。以ので速くすつ。大和為善録

父母を愛敬するを本として。兄弟夫婦親戚も對するも。皆あつるべし。各々其人の品ふよりて。愛敬まべし。疎くれば

も。たろそのふすべし。是愛なり。賤
し。々まごも。侮る。辱ら。ず。是敬あり。家
道訓。

第五章

む。の。皇祖天照大神。天孫尊。ふ。詔りせ
し。ふ。寶祚のさかえまさん。と。備さ。ふ。天
壤。こ。きは。まり。ふ。ある。べし。や。あり。天地
も。む。か。し。ふ。變。いら。れ。日月も。光り。枝。改

め。む。仰ぎて。尊。奉。る。べき。い。日嗣。ぎ。を
う。け。給。ふ。皇。ふ。た。ん。お。を。し。ま。は。し。統神皇正記

是を以て。我が國の道。乃。萬國。よ。ま。さ。む。ま
す。尊。く。め。で。多。き。を。知。り。て。仰。ぎ。從。ふ
べし。さ。ぐ。て。物。ぶ。と。し。ふ。根。本。衰。へ。て。末。葉
さ。か。ゆる。理。な。し。た。と。ん。ぞ。草。木。枝。う
る。ま。の。枝。葉。を。榮。え。し。め。ん。や。て。以。の
不。ご。撫。で。養。ふ。こ。も。根。本。を。忘。ま。て。土。か

ひ草ぎらぎらき。枯れ志がむが如く。世
戎治めんこと。以の程萬民を愛し之患
むことも。君小事ふる道不違ふ時ハ。上衰
へ亂きて。下ふやみ困しむ。道守之標

大海の。汐干て山ふ。なるまでよ。君ハか
たらぬ。君不悔しませ。山家集

毫釐も君をゆるがせしする心を。きざ
すものハ。必ぞ亂臣とふる。芥蒂も親を

たるもの。ふさる形あるもの。果たし
て賊子とふる。是の故。古へ聖人。道ハ
須臾も離るべし。離るべきハ。道不
あらざと説けり。但し其末をまろびて。
源をあきらめざき。事不臨みて。覺え
ざる。何やまりあり。神皇正統記

忠臣ハ。孝子の門より出づ。父母ハ。事ふ
る愛敬の誠を推して。君小事へ進んて

忠貞をほくさんと思ひ。退きて君乃
政教美事哉うけ順ひ。闕失を正し救ふ
べし。日新館童子訓

君小事へ奉ると。必だ先づ恩を蒙りて。
それ小従ひて。我が身の忠をも。奉公哉
も。右本海さんと思ふ人のみ侍るなり。
うし後ざまふ心得をるとあり。本より
世の中よ住めるを。君の恩徳なり。それ

を忘きて。猶不望之を高くして。世をも
君哉も恨むる人のみ侍る。以とうたて
しむとあり。竹馬鈔

論語を讀みて。父母小事へて。よく其力
をほくし。君小事へて。よく其身を致す
とあるを見てい。其如く親小事へて。我
の身の力も。財の力も。をしまほして。孝
をほくまべし。臣としてい。我が身を。我

がものふせはくそ。私を忘る。専ら君不
忠をつくまを。大和俗訓

第六章

以とけふきより。心だんやさしくまな
かある。友ふゆどなり。かまそめふも。猥
里ぶをしく賤しき友ふ。近よるべうら
ず。水い方圓のうつをもふ随ひ。人の善惡
の友ふよるこりふと。誠なるかふ。川女今

善人ふ交をれば。日々ふ善言を聞き。善
事を見習ひて。益あり。悪人ふ交をれば。
日々ふ悪言を聞き。悪行を見習ひて。損
あり。交をふ人を選択ふべし。大和俗訓
朋友の間。禮あつたれば争ひなし。喧嘩
口論を。かならば無禮よりおこる。人ふ
交をるふ。禮義正しく懇懃ふまは。人々
我この間。やぶあかりなくして。和ぎむ

つまじ。同上

伊川先生のこまひしい。近世の風俗。友不交なるの道と知らざりて。多ぶ心やすくあつるぎ合ひて。かどらしくおれを専らとほ。かやうにして相交ひる友い。互不狎ますぐる故不。やうそさむるなり。大和小學

横渠先生のたまひしを。今時の人友

不交ひるを見るよ。巧み不媚び極つらひて。人の氣ふいるやうなるりのをば。善きものをありて。入魂して。參會する毎不。互不肩をうち。袂とごり合ひて。喜び笑ふといへども。かやうの交ひりを。義を以て交なる不あらざる故よ。何事不よらば。一言も氣は合はざるを。何事不。やうそ中惡しくあるなり。友不交い

るの道い。互ふ處り下だり合ひて。始終
をうつるぐ心なく。ほく。一むを要こそすべ
しこそ。同上

朋友の交をりい。學文を講習して。友を
會し。人の人たる道を論じ。互ふ相責む
るよ善を以てし。懇切ふ表裏あく。勉め
て心を清くし。ほめやあり導き。仁を輔
け。徳を成すべし。朋友の義を以て交ひ

る故。深切ふ異見等ふ及びても。改めず。
又い不可ふるまけあらば。交をりを絶
つべし。日新館童子訓

人の隠すを聞き出だし。或い窺ひ見
るべし。はして懇意ふもなきもの
や。廣く狎ま近づくべし。何如かと
懇意乃ものごても。辭を崩し交をるべ
し。さい奴僕の交をりふ等しきと

小て。恥づべきとあり。朋友の善を責む
るにて。異見いふを。人の道なれども。故
ふく人の過ちをいふ。慚うる。古き過
失い。尚か更なり。戲言をまて。人の笑ひ
を催し。輕薄の容色すべし。財利の
をふし。價の高下すべし。吾が好む
事ふい。速い。進み。好まざる事。厭
ひ。倦きて。志をらくも耐へず。是等の事

は。一むべし。同上

友だちの交わりふ。心友面友の差別。情
義の親疎。さほぐ。ありこいへども。畢
竟皆信の道の本。互の志。同。同。同。
交わり親しむを。心友。こいふ。志。ちの
ひぬま。ごも。筋目。なる。或は同郷隣家
などにて。相交りて。親しきを。面友。こ
いふ。心友。面友。こも。情義の親疎。同。

小學修身書 卷之四
六十一
のらば。其ほごく。乃義理不從ひて。威
儀うやく。いさつ。和愿ふ。て。
偽りなく。勿論約束をどの。少くも違變
なきがら。信の道の大體なり。翁問答

小學修身書卷之四

明治十六年五月十一日出板板權所有届

文部省編輯局藏板

小學修身書

初等科之部

卷五

館	七
175	
4	
140	
六五册	一號 一架 函

第二三〇九號
共六册